

後期モダニズムとリベラリズムの奇妙な死
——I・A・リチャーズと「真理」をめぐる文学批評理論のジレンマ

秦 邦 生

1. 「モダニズムのイデオロギー」

Thou still unravish'd bride of quietness,
Thou foster-child of silence and slow time,
Sylvan historian, who canst thus express
A flowery tale more sweetly than our rhyme:
...
When old age shall this generation waste,
Thou shalt remain, in midst of other woe
Than ours, a friend to man, to whom thou say'st,
"Beauty is truth, truth beauty,—that is all
Ye know on earth, and all ye need to know." (Keats 288-89)

おまえ、まだ汚れていない静寂の花嫁よ、
おまえ、沈黙と緩やかな時間の養い子よ、
僕らの作る歌よりもさらに美しい花いっぱいのお話を、
このように表現することができる森の歴史家よ。
.....

いま生きているこの世代を老齢が減ぼすとき、
おまえは僕らの知らぬ不幸のなかでも依然存在し、
人間の友として、彼らにこう言うのだ、
「美は真理であり、真理は美である」と。それが
お前たちがこの世で知り、知らねばならぬすべてだ。

(中橋健二訳、三一二—一六)⁽¹⁾

最初の引用は、第二世代のイギリス・ロマン派を代表する詩人ジョン・キーツのあまりにも有名な詩「ギリシアの壺に寄せるオード」である。この詩は表題の壺に向けて「おまえ (Thou)」、そして「森の歴史家 (Sylvan historian)」と呼びかけることに始まり、壺の表面に描かれた恋愛の戯れや荘厳ないけにえの儀式的様子に思いを馳せたのちに、唐突に読者に向けて語り始めた壺

の次の言葉で終わる——「美は真理であり、真理は美である」と／それがお前たちがこの世で知り、知らねばならぬすべてだ（“Beauty is truth, truth beauty’—that is all / Ye know on earth, and all ye need to know.”）。

アメリカの「新批評」の代表的論客の一人クリアンス・ブルックスは、その主著『よくできた壺 (*The Well Wrought Urn*)』（一九四七年）に収録された論文で、「美」と「真理」を大胆にも等号で結ぶこの詩の結語が多くの異論を招いてきたと指摘しつつも、それがどんな異論だったのかは詳らかにしていない。これに対し、彼自身はこの一節を、詩全体のパラドックスやアイロニー構造から分離せず、内在的に精読することで「美は真理」という壺の言葉を弁護している。彼は次のように結論する。「[森の歴史家]は一握りの細部を選び出し秩序づけることで、美のみならず、本質的な真理への直観を私たちに与えている。……それが語る「歴史」には、神話の妥当性があるのだ（[The sylvan historian] takes a few details and so orders them that we have not only beauty but insight into essential truth. . . . Its “history” . . . has the validity of myth）」、と（Brooks 164）。

この読解には多重的なねらいが込められていた。第一に、沈黙した壺が語るという逆説に満ちたこの詩を対象に、新批評的「精読」の有効性を実演すること。第二に、精読の対象としての詩を「神話」として位置づけることで、それを通常の意味での「歴史」からは分離すること。第三にキーツの一節を拡大解釈することで、自律的文学作品を美のみならず（「神話の妥当性」を有する）超越的「真理」の直観の領域として演出することである。こうして「壺」の主張を彼に先立つ批判者たちから救出することでブルックスは、新批評的精読によってロマン派美学を擁護するのみならず、ロマン派の権威を借りて「文学の自律性」という新批評的ドグマを首尾よく補強してみせたと言えるだろう⁽²⁾。

フレドリック・ジェイムソンは、危険な政治への関与を厭わなかったT・S・エリオットやエズラ・パウンドらの戦間期モダニズムが冷戦期のアメリカにおいて「モダニズムのイデオロギー」へと改竄された、と論じている（Jameson 168）⁽³⁾。この指摘を受けた本稿の問いは次のとおりである。第二次世界大戦中に執筆され、戦後に書籍化されたブルックスのキーツ論の最大のねらいはまさに、戦間期モダニズムからその「不穏」な政治性を脱色し、それをイデオロギー化することにあつたのではないか。以下ではこの論拠として、「美は真理」というキーツの一節が、一九四三年のブルックスの解釈以前の段階で、エリオット、I・A・リチャーズ、W・H・オーデンなどの戦間期の詩人・批評家たちによってどう再解釈されてきたかを検討する。戦間期においてこの詩は、美学の認識論的価値をめぐる論争、さらに文学と社会の関係、あるいは美学と政治の関係をめぐる論戦の試金石として流通していた。結論を先取りすれば、この論争の真の掛金は、二〇世紀前半におけるリベラリズムの危機にあつたのである。

では戦間期モダニズムにおいて、美学の問題と政治的リベラリズムの危機はいかに交錯していたのだろうか。以下の議論ではまずこの危機を思いがけず体現した批評家として、一九二〇年代のイギリスで特に「精読」と「実践批評」を創始した存在として知られるI・A・リチャーズの批評理論を検討する⁽⁴⁾。その後、そのリチャーズ理論が体現したリベラリズムのジレンマに対する批判的応答が、エリオットのような盛期モダニズムを代表する詩人のみならず、しばしば「オーデン世代」と称される若手の詩人・批評家たちの三〇年代の後期モダニズムの政治的軌跡を規定した経緯を具体的に見てゆきたい。最終的に本稿は、こうした論争を踏まえて、「美」と

「真理」の挟間に立ちあらわれたモダニズムによるリベラリズムへの両義的批判を暗黙の裡に封殺することに、ブルックス的新批評のイデオロギー的な核心があったことを論証したい。

2. 「疑似陳述」のリベラリズム

客観的に見るとモダニズムの美学と政治がロマン派の詩の解釈をめぐって展開するのは奇妙な事態に思えるかもしれない。だが、その口火を切ったのはリチャーズだった。彼はすでに一九二四年の『文芸批評の原理』において詩のなかに「啓示」的価値を見出すロマン主義的文学観を強く拒絶していたが（*Principles* 237-43）、続く一九二九年の『実践批評』においてはさらに意地悪く、次のように述べていた。

On the other hand, there are those who succeed too well, who swallow 'Beauty is truth, truth beauty....', as the quintessence of an aesthetic philosophy, not as the expression of a certain blend of feelings, and proceed into a complete stalemate of muddle-mindedness as a result of their linguistic naïvety. (*Practical* 190)

ところが他方で、「美は真であり、真は美なり」とくると、それが混合された感情の表現だとは考えず、これこそ美学の真髄とばかり鵜呑みにする、おめでたい人たちがいて、自身の言語的幼稚さのせいで、完全に心的混乱の手詰まり状態にはまってしまう。（坂本公延訳、九〇－九一）

このようにリチャーズは、「美は真理、真理は美」という詩行はたんなる「混合された感情の表現」としてのみ読まれるべきであり、それを絶対的な真理として鵜呑みにする読者の「言語的幼稚さ」を嘲笑していたのである。それはまさしく彼の創始した精読と実践批評によって矯正されるべき心的態度だったのである。

一九二〇年代の盛期モダニズムの確立期において重要な役割を果たした詩人エリオットと批評家リチャーズの蜜月関係はよく知られている。ところが興味深いことに同年に発表されたダンテ論への注釈でエリオットは、リチャーズのこの発言を参照しながらも、次のように微妙な異論を唱えている。

I am at first inclined to agree with [Richards], because this statement of equivalence means nothing to me. But on re-reading the whole Ode, this line strikes me as a serious blemish on a beautiful poem; and the reason must be either that I fail to understand it, or that it is a statement which is untrue. (Eliot, *Selected* 270; underline added)

最初、私は〔リチャーズ〕に同意することに心が傾くが、その理由はこの同等の表明が私には何の意味もないからである。だがこのオード全体を読み直してみると、私にはこの行は美しい詩の大きな汚点だと思える。その理由は、私にはこの詩行が理解できないのか、あるいはこの陳述が真実ではないかのどちらかに違いない。（拙訳）

この引用の最後でエリオットが述べること——「私にはこの詩行が理解できないのか、あるいはこの陳述が真実ではないかのどちらか」——には、戦略的な曖昧さがある。というのも、「理解できないか、真実ではないか」という感想を述べることでエリオットは、一方でキーツの一節の真実性をリチャーズとともに拒絶しつつ、他方では、なおも一編の詩が「真実」を語ることを期待する読者としての態度を示しているからである。同じ詩に言及した二人の表現の微妙だが決定的な食い違いが問題化しているのは、次の点である——ある詩を一つの「感情表現」として読むときに、その「内容」の真偽に拘泥することは、どこまで妥当なのか。

実のところ、ここでエリオットがキーツの詩行への不満を介して暗に表明していたのは、リチャーズの文学批評理論の核心にある「疑似陳述 (pseudo-statement)」理論への計算づくの反論だったと理解できる。この理論の基盤は、一九二四年の『文芸批評の理論』以降リチャーズが一貫して依拠していた言語の二つの用法の区別にあった。すなわち、①実証的な真偽が問題となる「科学的 (scientific)」な言語使用と、②書き手や読み手の内面に訴えかける「感情的 (emotive)」な言語使用の二種類である (*Principles* 250)。リチャーズの主張によれば、ある詩を本当に深く味わうためには、読者は詩の「内容」に関する真偽の判断を停止し、その感情的効果のみに意識を集中する必要がある。例えば「美は真理、真理は美」という一節を鵜呑みにする読者は、それを真偽が問題となる「科学的陳述」として誤読しているにすぎない。この反対に、彼の定式によれば望ましい詩は真偽の判断から切りはなされた「疑似陳述」でなければならない。またその限りにおいて詩は読者の「感情」のみに訴えかけ、精神に価値ある調和をもたらすことができる——このように説くリチャーズの理論は、「感情」と「知」、すなわち「美」と「真理」のあいだに大きなくさびを打ち込むものだったのである。

言語の二つの用法に関する彼の区別はやや無用に複雑にも思えるが、その真のねらいを理解するためには、当時の文脈に差し戻す必要がある。サミュエル・ハインズによれば、一九三〇年代のイギリスに台頭した「オーデン世代」の若い作家たちに与えたりチャーズ理論の衝撃は①第一次世界大戦後の精神的荒廃のヴィジョン、②それに対する解決を与える形式としての詩、という二点にあった (Hynes 163)。リチャーズがこの最良の実例と見なしたのは、ほかならぬエリオットの『荒地』(一九二二年)だった。一九二六年の小著『科学と詩』につけた有名な注で、リチャーズは、ジョウゼフ・コンラッドの小説『ロード・ジム』から引用しつつ、次のように述べている。

[Eliot] has given a perfect emotive description of a state of mind which is probably inevitable for a while to all meditative people. Secondly, by effecting a complete severance between his poetry and all beliefs, and this without any weakening of the poetry, he has realised what might otherwise have remained largely a speculative possibility, and has shown the way to the only solution of these difficulties. "In the destructive element immerse. That is the way." (*Science* 64-5; underline added)

[エリオット] は、すべての思索的な人びとにとってここ当分おそらく不可避である一つの精神状態の完璧な喚情的記述をしてみてくれた。第二に、彼の詩とすべての信念と

の完全な分断を実現することによって、しかも詩をすこしも弱めることなしにこれを実現することによって、もしこうしなければ概して可能性として想像できるにすぎないと思われたものを実現し、これらの困難の唯一の解決法を示した。「破壊的な海に身を沈める。それしか道はあるまい。」(岩崎宗治訳 一一一)

ここでの彼のエリオット評価の核心にあるのは、特に下線部、彼の『荒地』が「詩」と「すべての信念」とのつながりを断ち切りつつ、なお優れた詩となりえたという解釈だった。この評価の背景にあったのは、リチャーズ特有の時代診断だった。彼の理解によれば、第一次世界大戦後のヨーロッパの精神的荒廃は、神々や靈魂を信じた伝統的な「魔術的世界観」が近代科学によって崩壊したその最終的な帰結だった。この文脈においてエリオットのモダニズム詩は、形骸化したあらゆる伝統的信念を取り去ったのちに、なお純粋な「詩」を書くという可能性を実現し、「このような困難」への唯一の解決の道を示したものとして賛美されたのだ。

リチャーズが「詩」の重要性を唱えたのは、この時代状況で伝統的信念の支柱を失い、相互に矛盾しあう衝動へと空中分解しかねない人間精神に対して、なおそれが一定の秩序と救済をもたらす可能性をそれに見出したからだった。人間の精神を矛盾しあう複数の衝動から成る不安定な構成物と見なす点で、リチャーズの理論は同時代の精神分析に多くを追っていたが(34)、彼が理想とする「詩」の創作と精読は、精神分析による介入なしに心理的秩序を構築する手段と見なされている。彼の言葉によれば、「詩人の仕事とは……秩序と一貫性を、したがって自由を、一つのまとまりとしての経験に与えること(The business of the poet ... is to give order and coherence, and so freedom, to a body of experience)」なのだ(55; ellipsis mine/岩崎訳 九〇)。

このようなリチャーズ美学にはいかなる政治的含意があったのだろうか。最近の研究でジョセフ・ノースは、アメリカ南部の保守主義を背景とする新批評との区別を強調するために、イギリスのリチャーズやウィリアム・エンブソンの政治を「左派リベラル」として位置づけている(North 25)。しかしながらリチャーズ美学が内包するのは、これよりもさらに両義的なリベラリズムとの関係性である。一方で、テリー・イーグルトンは、精神的秩序の確立を重視するリチャーズ理論における「人間主体は、ミニチュア版リベラル国家(a kind of miniature liberal state)のようなもの」だと指摘している。というのも、それは「最善を尽すには、その内部の相克しあう諸傾向のなかに平衡状態を創造せねばならない(to get the best out of itself must create an equilibrium between its conflicting tendencies)」からである(Eagleton 67)。また、そのような衝動の平衡状態、調和がもたらす「自由」が基本的に個人的なものとして想像されている点でも、リチャーズの批評は典型的にリベラリズム的なものだったと評価しうるだろう。

しかしながら、同時に興味深いのは、この理論がその脆さをみずから暴露しているように思える点である。上で確認してきたように、この理論によれば、人間精神が調和を達成するには、エリオットの『荒地』が行った(とリチャーズが考えた)ように、「虚構」としての詩をあらゆる「真理」や「信念」から分離しなければならない。言わばリチャーズが求めたリベラルな調和は、社会や政治からは完全に切断され、純粋に美学化される限りでのみ維持されうるものなのだ。この美学は確固とした伝統や依拠しうる永続的な信念の不在、さらに言えば安定した「内容」の不在のうえに、綱渡り的な平衡状態をその都度構築することを運命づけられている。いか

なる安定した土台をも欠落した心理的「秩序」の美学化——彼は、「疑似陳述」の理論をこのように徹底することで、リベラリズムのジレンマをはからずも白日の下に晒したのである。

3. ポストリベラリズムの諸相

デイヴィッド・トロッターやレイチェル・ポターなど一部の批評家たちは近年、戦間期モダニズムの政治をリベラリズムに対する反発という観点から説明している⁽⁵⁾。ファシズムや共産主義といった革命的政治へのモダニストたちの関心は、リベラリズムへの深い幻滅、トロッターのいう「ポストリベラリズム」に動機づけられていた。事実、当時のリベラリズムの「死」に関する診断は、左右の違いを越えてひろく共有されていた。一方で、単一民族共同体を称賛したことで悪名高い一九三三年の講演『異神を追いて』でエリオットは、「現代の闘争」は「端的に言えば、リベラリズムに抗する闘争 (the struggle, in a word, against Liberalism)」である、と断言していた (Eliot, *After* 48)。他方、一九三九年、第二次世界大戦直前のエッセイでオーデンは、「社会的民主主義」の不確かな未来にかすかな希望を託しつつも、なお「リベラル民主主義の終わりはいいことだと私には思える (I consider the end of Liberal Democracy a good thing)」と述べていた (Auden, *The Collected* 463)。

二度の大戦、ストライキ、大恐慌に立て続けに見舞われたこの時代では、こういった伝統的リベラリズムへの不信感は当然に思われるかもしれない。ただし、ポストリベラリズムの政治が、リベラルな価値観に対するたんにシニカルな懐疑とは異なることには注意すべきだろう。それはむしろ、リベラリズムへの期待に反比例した熱烈な反動だったと特徴づけるべきだろう。一九三七年の自伝でウィングダム・ルイスは、第一次世界大戦勃発直前、あるカントリー・ハウス滞在中にフォード・マドックス・フォードと交わした会話を振り返っている。「リベラルな政府は戦争に行けないはず (Liberal Governments can't go to war)」と述べるルイス自身に答えて、フォードは「リベラルな政権だからこそ、政府は宣戦布告するだろう (It is because it is a Liberal Government that it will declare war)」と無造作に言い放っていた (Lewis 58-9)。事実、未曾有の死傷者を生んだ大戦への参戦を決めたのは皮肉にも、戦前はさまざまな社会保障政策を導入し、進歩的と見られていたアスキスの自由党内閣だった。戦間期にリベラリズム批判とファシズムへの共感へとルイスを駆り立てたのは、フォード的な冷笑ではなく、むしろ彼がリベラリズムに抱いていたかつての素朴な信頼と、それゆえの深い幻滅感だったのである。

この時代的文脈に差し戻すと、前節で確認したリチャーズのいう「疑似陳述」の不気味な二面性があらためて際立ってくる。一方でリチャーズは、戦後精神の窮状を伝統的信念の決定的な喪失に帰していた。ところが他方で、詩が望ましい調和を達成するには、そもそも「真理」や「信念」を求める欲望自体を断念せねばならない。リベラルな調和を美学的に希求しつつ、このようにその無根拠性をみずから暴露した彼の文学批評理論は、奇妙な知的誠実さに貫かれている。

しかしながら、オーデン世代の若者たちが敏感に反応したのはまさにこの二面性だったのではないだろうか。彼らは一方で、リチャーズが提起した美学的解決を要する精神的荒廃のヴィジョンに深く共鳴しつつ、他方で「詩と信念の分離」には強く反発したのである。例えば、三〇年代に共産主義に最接近した詩人セシル・デイ・ルイスはリチャーズの『荒地』評を「もっとも悪質な批評の実例 (an example of criticism at its most vicious)」と断じていた (Day Lewis 22)。同世代

の批評家スティーヴン・スペンダーの一九三五年の第一評論集『破壊的要素』のタイトルが、前節でリチャーズが引いたコンラッド『ロード・ジム』からの孫引きであることは良く知られている。だがそのスペンダーも、その著書のなかでは「信念を持つ作家 (writers who have beliefs)」について語ることをみずからの使命としていたのである (Spender, *The Destructive* 190)。

ここまでの経緯をあらためて整理しておこう。まずリチャーズの精神的荒廃に対する「救済」としての詩という批評理論は、エリオットの『荒地』が象徴的に体現した盛期モダニズムへの理論的応答だった。ところが、この詩学理論が志向した調和は「感情」と「知」、「美」と「真理」のあいだを引き裂く大きな代価を払うものでもあった。いわゆるオーデン世代と呼ばれる作家たちの三〇年代後期モダニズムが政治へと向かった一因は、このようなジレンマへの両面価値的な応答だったのである。

しかしながら、ポストリベラリズムの政治的信念の追求がきわめて困難なものであったこともまた歴史的事実である。一九三六年の詩集『見よ、旅人よ』の詩の一節で、オーデンは「このイングランド家庭の自由／日光の下でのピクニックを許すのが／いかなる疑わしい行為なのか (what doubtful act allows / Our freedom in this English house, / Our picnics in the sun)」を反語的に問いかけていた (Auden, *English* 137)。このような自省のムードを共有しつつ、一九三七年の評論『リベラリズムからの前進』において、スペンダーはリベラリズムの理想と現実との乖離を厳しく批判している。それは一方で個人的自由の理想を掲げつつ、他方で、経済的リベラリズムの現実には格差と貧困、そして破局的戦争を生み出し、自由の享受を一握りの支配階級の特権に留めてきた。ところが、この区別を導入することでスペンダーが望んだのは、来るべき共産主義革命が、腐敗したりベラリズムの現実からリベラルな理想を救出し温存することだったのである。

Now that economic liberalism has served its turn and is discarded by the very people who owe it their financial and political ascendancy, the idealist aspect of all the liberal tenets, liberty of the individual, freedom, free trade, the rights of minorities lives all the more clearly. (Spender, *Forward* 133)

経済的リベラリズムがその役目を終え、そのおかげで経済的・政治的支配権を得ていた当のひとびとにすら見捨てられた今だからこそ、あらゆるリベラルな信条の理想的な側面——個人の自由、解放、自由貿易、マイノリティの諸権利など——は、いっそう明るく生気を放っているのだ。(拙訳)

この主張の当否とは別に、当時のロシアに現存した共産主義体制がスペンダーの願望とは遠いものであったことは論を俟たないだろう。ポストリベラリズムの政治は歴史的リベラリズムへの幻滅から出発する限りにおいて、結局のところ彼らが生得したりベラルな価値観を脱却しえなかったのである。

4. エリオット、コードウェル、オーデン

以上の文学史的構図を踏まえて、もう一度キーツの詩をめぐるリチャーズとエリオットの応酬

を振り返ってみよう。「美は真理、真理は美」という詩行の陳述内容を捨象し、ただひたすら感情表現として読むことを勧めた前者の立場は、詩と認識論のあいだに開いた亀裂に直面しつつも、なお美学的調和を希求するものだった。他方、第二節で引用したダンテ論に挿入されたエリオットのキーツへの不満は、実は二つのことを同時に述べている。第一に彼の異論が暗に示唆しているのは、「美 (beauty)」自体への不満だった。一九三三年の『詩の効用と批評の効用』において彼は、マシュー・アーノルドに反論して次のように述べている。「詩人の本質的強みは美しい世界を扱うことではない。それはむしろ美醜の底を見据え、倦怠、恐怖、そして栄光を見ることなのだ (the essential advantage for a poet is not, to have a beautiful world with which to deal: it is to be able to see beneath both beauty and ugliness; to see the boredom, and the horror, and the glory)」(Eliot, *The Use* 106)。つまりエリオットにとって、狭義の「美」はその裏に深遠を隠す表層に過ぎないものだった。

ところが同時に、先の引用の後半部分で「この陳述は真実ではない (this statement is untrue)」と述べることでキーツの詩を拒絶する身振りで、エリオットは実のところリチャーズの「疑似陳述」の理論に逆らって、詩の内容の真偽にあくまでも拘泥する読者としての姿勢を示している。この二つの含意を総合すれば、次のようになる。実のところここでエリオットは、キーツの詩を拒絶しつつも、狭義の「美」から拡張された「美学」が、なお「真理」を提示する可能性を求めているのである。

彼のより踏み込んだ発言は、一九三〇年の論考「詩とプロパガンダ」に見られる。この小論でエリオットは再度リチャーズを標的として「感情」と「知」の関係についてのみずからの美学的立場を明示した。この論考でエリオットは「いかなるものでも、詩はそれが真実だと証明はできない (Poetry cannot prove that anything is true)」といった譲歩している。にもかかわらず彼は、詩は「真理」に「感覚的具体化 (a sensuous embodiment)」を与えることで、その真理をより魅力的に示す役割は果たせる、とも説いている。「詩は感情を知性的に承認し、知性を美学的に承認する (It provides intellectual sanction for feeling, and esthetic sanction for thought)」と彼が述べるのはそれゆえだろう (Eliot, "Poetry" 602)。彼自身の言葉によれば、あるべき詩人の姿とは、なんらかの信念ないし信仰の体系を背負った「責任あるプロパガンディスト」なのである⁽⁶⁾。

一九三〇年代冒頭の時点で大胆にも詩を「プロパガンダ」と呼ぶことを厭わないエリオットは、モダニズム美学と認識論のあいだに開いた傷口を癒しうるのは、第三項としての「政治」のみであることを当時の詩人たちの誰よりも早く、また明晰に認識していたように思われる。言うまでもなく彼の場合の政治とは、ひとつの信仰と文化を共有する保守主義に立脚したアンチ・リベラリズムだった。逆説的ながら、あたかもエリオットは、いったんは拒絶した「美は真理、真理は美」というキーツの言葉を、目指すべき到達点として設定しなおしたかのようだ。

ではもう一人、この時代のイギリス詩を代表するもう一人の詩人であるオーデンの場合はどうだったのだろうか。残念ながら戦間期の彼の著作中に、キーツを巡る論戦への明確な言及を見つけることはできない。しかしながらジョン・フラワーが指摘する通り、キーツとの暗黙の対話は、一九四〇年の詩集『もう一つの時代』に収録された「オルフェウス」という次の詩に見てとれる (Fuller 265)。

What does the song hope for? And the moved hands
A little way from the birds, the shy, the delightful?
To be bewildered and happy,
Or most of all the knowledge of life?

But the beautiful are content with the sharp notes of the air;
The warmth is enough. O if winter really
Oppose, if the weak snowflake,
What will the wish, what will the dance do? (*English* 212-13)

この歌は何を望んでいるのか？ 爪弾くその手、
小鳥たち、この内気で楽しい連中ほどに近い手は？
感動し歓喜に酔うこと？ それとも
この生を認識すること？

美しい者たちは歌の調べにご満悦だ
申し分のないこの暖かさ。だが、もしほんとうに冬が、
もし弱々しい雪が、叛いたら、
この希望は、舞踏は、どうしようというのか？ (岩崎訳 七〇)

この詩は一九三七年四月、オーデンのスペイン内戦訪問直後に発表された。矢継ぎ早の疑問形は、人間の芸術としての「歌」と、「暖かさ」や「雪」といった自然の力とを対置している。自然に陶醉する「美しい者たち」の歓喜は、「生の認識」への願望とは相いれないのではないか——もしこの詩の問いかけをこう理解できるとすれば、オーデンもまた「感情」と「知」、「美」と「真理」との分断に加担しているのだろうか。彼の立場はリチャーズやエリオットとはどう違うのだろうか。

ここで議論の補助線として、一九三七年初頭にスペイン内戦で若くして戦死したイギリスのマルクス主義批評家クリストファー・コードウェルの議論を参照してみたい。オーデンは左翼的共感を持ちつつも、同世代のデイ・ルイスやスペンダーなど他の詩人・批評家たちとは異なり、共産主義とは一定の距離感を保っていた。ところが興味深いことにオーデンは、コードウェルの死直後に出版された遺著『幻想と現実』をいち早く書評し、それを「リチャーズ以降、最重要の詩論 (the most important book on poetry since the books of Dr Richards)」と絶賛していた (Auden, *The Complete* 387)。

ただし、早世したコードウェルを純粹にマルクス主義だけの観点から位置づけるのは困難である。『文化と社会』のなかでレイモンド・ウィリアムズは三〇年代イギリスのマルクス主義批評に言及して、それは「マルクスによるロマン主義の変容というよりもマルクスを吸収したロマン主義ではなかったか (whether this is not Romanticism absorbing Marx, rather than Marx transforming Romanticism)」と疑問を呈している (Williams 265)。事実、コードウェルはしばしば好んでキー

ツを引用していた。『幻想と現実』において彼は、「人間は現実の生において、「美は真理、真理は美」というキーツの予言を実現すべく懸命に努力している (man in his real life is always actively striving to fulfil Keats' forecasts ... Beauty is truth, truth beauty)」と述べている (Caudwell, *Illusion* 134)。

さらに、戦死によって草稿として残され、のちに刊行された「美学の概念」と題する論考を参照すると、このような主張において設定された仮想敵がエリオットだったことが分かる。コードウェルは第二節で引用したエリオットのキーツ批判を相手取り、「美」と「真理」の分断はブルジョワ社会の退廃の徴候に他ならない、と語気激しく論じていた。コードウェルによれば、資本主義による断片化は、科学と芸術に本来備わった社会的性格を喪失させ、その結果、「科学からは望ましさを、芸術からは現実性を剥奪する (to have robbed science of desirability and art of reality)」ことにつながった。「ブルジョワ文明における真実は非人間的なものであるゆえにもはや美しくない。ブルジョワ文明における美は、空想でしかないゆえにもはや真実ではない (The true is no longer beautiful, because to be true in bourgeois civilization is to be non-human. The beautiful is no longer real, because to be beautiful in bourgeois civilisation is to be imaginary)」のである (Caudwell, *The Concept* 100)。エリオットの保守主義とコードウェルのマルクス主義、二人のイデオロギー的相違を考えると奇妙なことだが、エリオットにとってと同様にコードウェルにとってもまた、「美」と「真理」のあいだに開いた傷口を癒しうるのはやはり、自壊的な危機をまねいたりベラリズムを乗り越える「政治」のみだったのである。

この事実を踏まえてオーデンに立ち戻ると、上で言及した彼のコードウェル書評と「オルフェウス」とがほぼ同時期に書かれていることは示唆的である。一方の「批評家」としてのオーデンは、芸術と科学の弁証法的総合を説くコードウェルのマルクス主義を肯定していた。だが他方の「詩人」としてのオーデンは、「美」と「生の知識」との両立にやや懐疑的であったようだ。この両義的態度は、三〇年代末の彼の共産主義への懐疑とおそらく並行的だったのだろう。果たして「美」と「真理」を和解しうるのはかどうか——彼にとってこれはまったく同時に美学的かつ政治的な問題であり、乗り越えがたいジレンマだったのである。オーデンにとってこの問いが戦間期だけのジレンマではなかったことは、一九六二年の評論集『染物屋の手』に書きつけられた次の一文に伺える。「芸術は、美と真に対するわれわれの欲望と、美と真が同一ではないというわれわれの知識から生じる (Art arises out of our desire for both beauty and truth and our knowledge that they are not identical)」 (Auden, *The Dyer's* 337; 中桐雅夫訳、三〇二)。

5. おわりに

最後にここまでの議論をまとめよう。本稿では「美は真理、真理は美」というジョン・キーツの詩行への戦間期におけるさまざまな応答を検証してきた。リチャーズの批評理論による「美」と「真理」の分断は、美学的調和を望みつつ、それをいかなる信念にも定位できないベラリズムの危機に向き合っていた。他方、「美」と「真理」を再結合する試みが徹頭徹尾政治的なものであったことは、エリオットとコードウェルについてみた通りである。オーデンの詩と批評は、この前者と後者あいだで揺らいでいる。以上を踏まえると、冷戦期の新批評のイデオロギー性がより明確に見えてくる。クリアンス・ブルックスもまた、「美」と「真理」の等号を肯定してい

た。しかしながら彼は、詩の「神話」化によってキーツを肯定することで、「美」と「真理」の狭間に置かれたレイト・モダニズムの政治と、その困難を首尾よく封殺したのである。

第二次世界大戦勃発を前にアイルランド出身の詩人ルイ・マクニースは「自由放任主義の終わりを」を歌っていた（四九）⁽⁷⁾。新自由主義の現代に生きる私たちは、この診断が時期尚早であったことを苦いほど良く知っている。レイト・モダニズムの政治はその目標を遂げることなく、モダニズムの困難はたんにイデオロギー化されてしまった。しかしながら、現代の政治状況を特徴づける「ポスト・トゥルース」は、「真理」の不確かさをめぐるモダニズム期の文学批評の歴史に、あらたな緊急性を与えているように思われる。だとすれば私たちはまず、リチャーズとともに、「美」と「真理」のあいだの亀裂を見つめるべきではないか。あるいはオーデンにならって、次のように言うべきだろうか。芸術のみならず批評もまた、私たち自身の「欲望」と「知識」のズレから生まれてくるのだ、と。

* 本稿は日本英文学会第八七回全国大会シンポジウム第二部門「美学とリベラリズム——ロマン主義からモダニズムまで」（於立正大学、二〇一五年五月二三日）における口頭発表に大きな加筆・修正を加えたものである。本研究は JSPS 科研費 JP18H00653 の助成を受けたものである。

注

- (1) 以下の引用では、ブロック引用においては英語の引用を先に置き、その後、参照可能なものについては基本的に既訳から対応する引用を添える。本文中の引用では読みやすさを優先し、まず日本語訳を起し、マルカッコ内に適宜英語の原文を添える。
- (2) Dries Vrijders の論考は、ブルックスのキーツ解釈と同時代のケネス・バークによる解釈とのあいだに潜在的な論争関係を見ている。これに対して本稿では、ブルックスの論考が暗示しつつ明確な言及を回避したものとして、一九二〇年代から三〇年代においてモダニストの詩人・批評家たちのあいだで交わされた論戦の重要性を浮き彫りにする。
- (3) 具体的にここでフレドリック・ジェイムソンは、アメリカ美術における抽象表現主義に随伴した美学理論に「モダニズムのイデオロギー」を見出している。
- (4) 近年のリチャーズ再評価の試みとしては North, Chapter 1 を参照。ただしリチャーズの「実践批評」を望ましい批評の可能性を切り開いたものとして評価するジョセフ・ノースに対して、本稿ではリチャーズ批評のリベラリズムの危機との関係性、ならびにその根本的な両義性に焦点をあわせる。
- (5) モダニズムのリベラリズム批判については Trotter 9, 117-18 ならびに Potter 177-81 を参照。
- (6) Benjamin Kohlmann はエリオットのこの立場表面は「リチャーズの擬似陳述理論への反論」であったと論じている (Kohlmann 30)。
- (7) 一九三九年三月の日付を持つ『秋の日記』の序文においてマクニースもまた、「科学」と「詩」の関係をめぐるリチャーズ的理論が提起した難問に言及している。「抒情詩の真実は科学の真実とは異なる。そしてこの詩は抒情詩とメッセージ詩の間を行くものである。……だが私見では、詩とは何よりも誠実であるべきで、誠実さを犠牲にして「客観的」であったり明瞭であったりすることを私は拒否する」（八-九）。

引用文献

- Auden, W. H. *The Complete Works of W. H. Auden Prose and Travel Books in Prose and Verse Volume I 1926–1938*. Ed. Edward Mendelson. Princeton UP, 1996.
- . *The Dyer's Hand and Other Essays*. Faber, 1962.
- . *The English Auden: Poems, Essays and Dramatic Writings, 1927–1939*, edited by Edward Mendelson, Faber, 1977.
- Brooks, Cleanth. *The Well Wrought Urn: Studies in the Structure of Poetry*. Harcourt, Brace & World, 1947.
- Caudwell, Christopher. *Illusion and Reality: A Study of the Sources of Poetry*. Lawrence & Wishart, 1937.
- . *The Concept of Freedom*. Lawrence & Wishart, 1977.
- Day Lewis, Cecil. *A Hope for Poetry*. Basil Blackwell, 1935.
- Eagleton, Terry. *Figures of Dissent: Critical Essays on Fish, Spivak, Žižek and Others*. Verso, 2003. Print.
- Eliot, T. S. *After Strange Gods: A Primer of Modern Heresy*. Faber, 1933.
- . "Poetry and Propaganda." *The Bookman*. (February 1930), pp. 595–602.
- . *Selected Essays*. Faber, 1932.
- . *The Use of Poetry and the Use of Criticism*. Faber, 1933.
- Fuller, John. *W. H. Auden: A Commentary*. Princeton UP, 1998.
- Hynes, Samuel. *The Auden Generation: Literature and Politics in England in the 1930s*. Pimlico, 1992.
- Jameson, Fredric. *A Singular Modernity: Essay on the Ontology of the Present*. Verso, 2002.
- Keats, John. *The Major Works*, edited by Elizabeth Cook. Oxford UP, 2001.
- Kohlmann, Benjamin. *Committed Styles: Modernism, Politics, and Left-Wing Literature in the 1930s*. Oxford UP, 2014.
- Lewis, Wyndham. *Blasting and Bombardiering: An Autobiography [1914–1926]*. Revised ed. Calder, 1982.
- North, Joseph. *Literary Criticism: A Concise Political History*. Harvard UP, 2017.
- Potter, Rachel. *Modernist Literature*. Edinburgh UP, 2012.
- Richards, I. A. *Practical Criticism: A Study of Literary Judgment*. Routledge and Kegan Paul, 1929.
- . *Science and Poetry*. Kegan Paul, 1926.
- Spender, Stephen. *The Destructive Element*. Jonathan Cape, 1938.
- . *Forward from Liberalism*. Victor Gollancz, 1937.
- Trotter, David. *Paranoid Modernism: Literary Experiment, Psychosis, and the Professionalization of English Society*. Oxford UP, 2001.
- Vrijders, Dries. "History, Poetry, and the Footnote: Cleanth Brooks and Kenneth Burke on Keats's 'Ode on a Grecian Urn.'" *New Literary History*. 42.3 (Summer 2011), pp. 537–52.
- Williams, Raymond. *Culture and Society 1780–1950*. Penguin, 1961.
- オーデン、W・H 『もうひとつの時代』 岩崎宗治訳、国文社、一九九七年。
- 、『染物屋の手』 中桐雅夫訳、晶文社、一九七三年。
- マクニース、ルイ 『秋の日記』 辻昌宏・道家英穂・高岸冬詩訳、思潮社、二〇一三年。
- リチャーズ、I・A 『科学と詩』 岩崎宗治訳、八潮出版社、一九七四年。
- 、『実践批評——英語教育と文学的判断力の研究』 坂本公延訳、みすず書房、二〇〇八年。
- 、『文藝批評の原理』 上下巻、岩崎宗治訳、垂水書房、一九六二年。